町人権教育研修会・９月13日(金)　＊66名が出席

テーマ：「命、そして家族への思い ～井村さんが伝えたかったこと～」

今年度の町の人権教育研修会が９月13日に総合文化センターで開かれました。この研修会は、一つのテーマをもとに“人権”のあり方について参加者の皆さん方がじっくりと話し合い、考え合う機会として毎年開催されてきました。

今年は、今から40年以上前に出版された井村和清著『飛鳥へ、そしてまだ見ぬ子へ』に描かれた昭和の家族の姿にふれることを通して、現在の家族をめぐる様々なあり方や生き方について、参加者一人一人が意見を出し合い、考えを深めることができたように思います。

朗読家　中澤由佳さん

参加者の皆さんに事前に実施したアンケートへの回答から

〈井村さんが遺した本書について〉

○死を前にしたときに、井村さんのような前向きな気持ちになれるかどうか。本当に優しく、心の強い方だと思います。

○井村先生のような慈しみの心を持った方が世の中に増えたならば、今のような生きづらい時代にはならなかったのではないか。どうしてそのような気持ちで最後を迎えられたのか。愛すること、愛されることの大切さを感じました。

〈あなたにとって家族とは？〉

○家族がいるから日々頑張れたり、どんな困難があっても乗り越えられていると思う。一番大切なのは家族だと思う。元気でいてくれる家族に感謝しかない。

○家族をめぐる社会の問題が頻発している現在、そのあり方が問われている。

〈もし自分が井村さんのような状況に陥ったとしたら〉

○残された人生を親しい人たちと精一杯悔いを残さずに生きていきたい。

○子どもたちに伝えられる精一杯の生きる術を残しておきたい。障がい者である息子については、支援者のためのサポートブックなどを整理しておきたい。

研修会(朗読公演会、分散会による話し合い、全体会)を終えて

○井村さんの手記、その朗読、感動しました。命や家族の愛についても考えさせられました。分散会では、“思いやり”について深めることができました。

○分散会では幅広い年齢層の方々と意見交換ができ、世代間での捉え方の違いなど、多くの意見が聞けました。人権、命、相手を認める思いが強くなりました。

○最小の社会である家族がいかに大切であるか、再認識した。愛されて育った子は愛する家族を持つことができる。思いやりのある子に育つよう願う。

分散会の様子

■諏訪湖博物館12月の休館日は、２・９・16・23・29・30・31日です。

生涯学習
No.547
かおり高い文化のまち
発行　下諏訪町教育委員会
編集　生涯学習編集委員会

〒393-8501
長野県諏訪郡下諏訪町4611-40
(下諏訪総合文化センター内)
☎0266-27-1111(内線718)
FAX 0266-28-0131
E-mail=syougai@town.shimosuwa.lg.jp

松﨑教育長の挨拶より

当町では、人権感覚の育成と尊重に関する方針と致しまして、「他人を思いやり、命を大切にする社会を実現するために、町民一人一人が人権問題を自分の問題として捉え考えることができるように、地域・学校・家庭や関係機関の連携により、各種の研修会を実施したり、啓発活動などを通して、心情に訴える人権教育を一層推進します」としています。特にここ数年間、命を大切にする社会の実現に向けて研修を深めてまいりました。

これからの全体会に関しましては、昨年度まで、町の音訳ボランティアグループのやまびこの会の方、町の社会教育指導員、昨年はコミュニティスクールのお話の部屋でお世話になっております増澤さんからの読み聞かせなどを通して、この後の分散会でつなげる導入とさせていただく朗読公演を行ってきました。

とても好評であったということで、今年も岡谷市在住の朗読家でいらっしゃいます中澤由佳さんに公演をお願いして、井村さんの著作『飛鳥へ、そしてまだ見ぬ子へ』をお聞かせいただきます。本日のテーマであります「命、そして家族への思い」ということで、「井村さんが伝えたかったことは一体何だったのか」を受けまして、現在の様々な課題と向き合いながら、語り合っていただけたら幸いです。

皆様からお寄せいただきました事前のアンケートですけれど、様々な貴重な内容がありまして、現時点での皆様のホンネでありますとか、お考え、いろいろなことで心打たれるものがありました。是非その考えやご自分の今の心境などを元にして、ご感想やお考えを含めて分散会で発表いただけましたら嬉しいなと思っています。

○『飛鳥へ、そしてまだ見ぬ子へ』について

＊本書は昭和55年に祥伝社より刊行されました。現在は文庫本で入手可。町図書館にもあります。

この本の著者井村和清さんは、有能な医師として周囲の期待を一身に背負いながら、３１歳という若さで不治の病に冒されます。井村医師は、迫り来る死の影に立ち向かう中、最後まで生きる勇気と優しさを失わず、わが子と妻、両親や周囲の人々に宛てて一冊の手記を残しました。

＊　　＊　　＊

「ふたりの子供たちへ・・・心の優しい、思いやりのある子に育ちますように。悲しいことに、私はおまえたちが大きくなるまで待っていられない。私の右膝に発症した肉腫は、私が自分の片足を切断する手術を希望し、その手術が無事にすんだにもかかわらず、今度は肺へ転移した。（略）思いやりのある子とは、まわりの人が悲しんでいれば共に悲しみ、よろこんでいる人がいれば、その人のために一緒によろこべる人のことだ。思いやりのある子は、まわりの人を幸せにする。まわりの人を幸せにする人は、まわりの人々によって、もっともっと幸せにされる、世界で一番幸せな人だ。だから、心の優しい、思いやりのある子に育って欲しい。それが私の祈りだ。　さようなら。　私はもう、いくらもおまえたちの傍にいてやれない。おまえたちが倒れても、手を貸してやることもできない。だから、倒れても倒れても自分の力で起きあがりなさい。　さようなら。　おまえたちがいつまでも、いつまでも幸せでありますように。　　雪の降る夜に　　父より」

■下諏訪総合文化センター12月の休館日は、３・10・17・24・28・29・30・31日です。

「生きる」を支える

下諏訪町
社会福祉協議会　日高（ひだか）　希望（のぞみ）

井村さんはご自身の死が迫りくる中、それを受け入れて立ち向かいながら、家族や周囲の人たちを思いやることのできた、とても強い方だと感じました。私自身、義母を癌で亡くしております。五十二歳で余命一年半と言われ、亡くなったのは五十八歳の時でした。

義母は医師から手の施しようがないと言われてからも、癌治療で有名な全国の医師を訪ねて歩きました。何とかして生きたいと思ったのでしょう。目の前に迫りくる「死」を、自分がいなくなるという現実を受け入れるということは、とても過酷なことだと思います。だからこそ、その方が望む生き方・過ごし方を、時には一緒に悩み、考えながら支えて行くのが我々の使命なのではないかと思いました。

そのために「大切なものは、いつだって、目には見えない」と井村さんの本にもあるように、相手の思いや気持ちを考え、それに寄り添いながら関わることのできる人になりたいと感じました。

＊　＊　＊

人権教育研修会を通して

下諏訪消防署　西郷（さいごう）　樹（たつき）

今回の研修会では、「井村先生が伝えたかったこと」をテーマとして、意見交換を行いました。この会を通して、私は井村先生が寿命を知り、自分の死を意識して行動することができて良かったと思いました。

消防官として仕事をしていて、病気や事故などで命を落としてしまう人を目の当たりにしてきました。亡くなった人たちは自分の最後を意識せず、その日を迎えてしまっていると思います。その方たちは、きっと何かを残す準備をしてその日を迎えた人は少ないと思います。

その点、井村先生は自分の死を意識し残された時間で本を書きました。井村先生は本のはじめで「私の心の形見になると思った」と書いています。その本を書くことで、井村先生の思いや願いが生きた文字となって残された人たちに届けることができたと思います。

今回の研修会では、様々な方と意見を交換し合いました。参加されている方々それぞれにいろいろな考えがありました。年齢を超えて意見を発表し、考えが深められたことはよい経験となりました。

＊　＊　＊

命や家族に対して思いやりのある子どもを育てるために

下諏訪南小学校　小林（こばやし）　明加（はるか）

『飛鳥へ、そしてまだ見ぬ子へ』の本に描かれた、昭和の家族の姿や医師の井村さんの生き方等についての感想を分散会で話し合いました。

残された人生の中で、主人公のように生き抜くことができるのか、また、命や家族、移り変わる社会に対して、どうしていけばよいのか、自分自身の在り方や生き方を見つめ直す機会になりました。

私は、井村さんは、感謝、思いやり、希望、愛情があふれている方だと思いました。そんな井村さんの姿に対して、私は、未来に希望を持ち、命や家族に対し感謝や思いやりを持つことができる子どもを育てるために、教員として、次のようなことを行っていきたいと思いました。

まずは自分自身が成長をし、子どもたちにかける一言や、子どもたちとの一瞬の関わりにも気を配り、子どもが受け取る言葉を選びながら、愛情を注いでいくことに取り組んでいきたいです。子どもを認め、子どもが幸せな毎日を送ることができるよう、精一杯支えていきたいと思いました。

■下諏訪体育館の12月の休館日は、3・10・17・24・28・29・30・31日です。

下諏訪町人権教育研修会の講評より

南信教育事務所　生涯学習課指導主事　水野　直昭

消防署員の方から「救急活動を行っていく中で、患者さんの病態を観察するだけで、その人自身の気持ちまでは考えられていなかったのではないかと思えるきっかけになりました。今後は、数ある現場に慣れてしまうことなく、つらく苦しい思いをしている人の気持ちにも寄り添える消防職員になりたい」と本を読んでの感想が寄せられました。このように、多くの方が井村さんの生き方を目の当たりにして、今の自分を省みています。

また「もし自分自身が井村さんの状況に陥ったら」という質問に対しては、70年代の方が「私の年代ですと、夫のことが心配です」と書いてありました。自分自身のことではなく、旦那さんのことを考えられるこの方のご意見には頭が下がります。

これは、井村さんが自分の子どもに対しての願いでもあった「心の優しい、思いやりのある子に育ちますように」という思いと重なり、人権教育で大切にされる「思いやりの心」を振り返る機会になりました。

会の最初に行われた、朗読プロフェッサーの中澤由佳さんによる朗読講演では、目を閉じて聞いていると情景が浮かび、井村さんがすぐそこにいて、横で話をしているような気持ちになりました。また、分散会の中では家族への思いや死に直面した話などが語られ、そうした思いから「日々（一日一日）を大切にしていきたい」という意見が多く出ていたのではないかと思います。

世の中はＩＴやインターネットの世界になり、人と人の関わりはもちろん、家族の絆も薄れてきてしまっているような感覚になります。そうした中「家族についての思い」や「自分にとっての家族」を考える機会になったと思います。

学校においても「命」や「家族」への思いを語る場面があります。私自身、20年前に母を亡くした際、生徒に「死」について話したことがあります。ただ、死の話は悲しみしか出てこないと思い、母が亡くなったすぐ後に生まれた娘を、小さくてもこんなに懸命に生きているということを伝えたくて、教室に連れていったこともあります。「命を語ること＝自分が経験した死を語ること」ととらえずに、「命を語ること＝生まれてくる子や小さくても懸命に生きている乳児について語ること」もいいと思いますし、子どもたちには「家族と生き方を話したり、様々な経験をした大人と出会って話をしたりすること」を今後大切にしてほしいと伝えてもいいのではないでしょうか。

最後に、井村さんの本を読んでいると、井村さん自身が「医者として配慮する心」をもち「患者としても前向きな気持ち」をもって毎日を過ごしているかが読み取れます。そして、本の中で一番出てきたのが「ありがとう」と「感謝」という言葉です。井村さんは本の中で、星の王子様の作者であるサン＝テグジュペリの言葉「大切なものは、いつだって、目には見えない」を引用しています。まさに井村さんの伝えたいことこそ、この言葉に凝縮されているのではないでしょうか。

そして私たちも、この言葉を心にとめて生きていきたいものです。

下諏訪町では、毎年「人権教育研修会」を行っています。この研修会について、テーマや話し合いの仕方など、是非ご意見をお寄せください。また、大勢の皆さんのご参加をお待ちしています。

■下諏訪図書館の12月の休館日は、２・６・９・16・23・29・30・31日です。

小さな想いを形に

西赤砂　長崎　圭祐

料理が好きになり始めた頃

初めまして、「笑間」の長崎圭祐です。私が料理を好きになったキッカケ、それは保育園の年中さんの時に、家庭訪問で来てくれた憧れの先生に、オレンジを切って出したことでした。先生から凄くほめられたのですが、この出来事がこれ程までに自分の人生を決定づけることになろうとは・・・。

料理が好きになり始めた小学校二年生の時、親に連れられて行った居酒屋で、大きな背中をした大人たちが御柱の話で大いに盛り上がり、お酒を酌み交わし、活き活きとしている姿が目に留まりました。その年の御柱祭に祖父と参加。大人たちの勇ましさと、迫力のある大木が声と力の一体感で引っ張られ進む姿に感動し、その光景が心に刻まれました。それは、大人が活き活きと輝く居酒屋を開きたい!!と思う瞬間でもありました。

月日が経ち、東京で修業をし、帰省してまた飲食業に携わりいろんな経験を重ねていく中で、悩み苦しみ、飲食から離れ考え込んでしまう時期もありました。

しかしそんな私を支えてくれる友人や家族、私を信じて引っ張り出してくれた諸先輩のお陰で、もう一度飲食という舞台に立つことを決心しました。

独立をするということは楽しいことだけではありませんが、夢や希望がたくさん詰まっていると思います。

「笑間」では、「お客様に笑顔溢れる”間“を創り、皆が集い本気の笑顔を生む仲間を創ること」を使命としています。お客様にどうしたらこの空間で幸せになってもらえるだろうか、スタッフの皆はどうしたら笑顔でいられるだろうか、卒業生は新たな夢や希望を掴めているだろうかを日々考え営業しています。

私が大切にしている言葉の1つに、「神様は乗り越えられない試練は与えない」というのがあります。どんな時でもこの言葉の意味を考え、前へ前へと思う気持ちを忘れずに行こうと思います。

今の私の課題は、下諏訪町赤砂崎防災公園の活性化です。今年は赤砂みずベテラスという事業に参加させていただき、春はお花見、夏はビヤガーデン、秋はスポーツ体験やクラフト市などのイベントに関わることができました。大好きな下諏訪町に感謝を伝えられる絶好のチャンス。人の手が加わり、煌めきが生まれ、仲間が集いスポットで照らされ、そこがキラキラした陽太に変わると私は思います。

これからも全力前進で楽しませていただきます。

赤砂みずベテラスの仲間たち

★ 令和２年　下諏訪町成人式のお知らせ

成人該当者：**平成11年４月２日～平成12年４月１日までに生まれた人**

期　日：**令和２年１月12日（日）**
受　付：**午前11時30分**
入　場：**受付終了次第**
開　式：**正午**
場　所：**下諏訪総合文化センター**

該当者（当町在住の方・親等が在住の方）には、出欠席の往復ハガキを11月初旬にお送りしました。必要事項をご記入の上ご返信ください。

記念となる成人式を自分たちで運営してみませんか？

成人を迎える方の中から、成人式運営スタッフを募集します。役割は、式典受付・町民憲章の唱和・成人の詞・司会・祝電披露などです。希望される方はご連絡ください。

問い合わせ：下諏訪町教育委員会　生涯学習係　　☎27―1111（内線718）

町立図書館のお知らせコーナー

下諏訪町立図書館やまびこの会会員が朗読録音奉仕者の表彰を受けました。

公益財団法人鉄道弘済会は毎年朗読録音奉仕者の表彰を行っています。今年、視覚障がい者等のために音訳をしている久保村さだ子さんが朗読奉仕者表彰を、小口則子さんが奨励賞を受賞なさいました。久保村さんの代表作は「ジョン・マン」、「みおつくし料理帖」などです。小口さんの代表作は「それでもわたしは山に登る」です。やまびこの会では「クローズアップしもすわ」も音訳しています。下諏訪町ホームページに掲載されている広報のページで聞くことができます。ぜひ聞いてみてください。　　下諏訪町立図書館　井上

十二月のこゝ

最近のこと（家族）

私は四人兄弟の末っ子。生まれ育った頃は、茅葺（かやぶき）の家に８人家族で暮らしていた。母は今年米寿を迎える。そんな母を祝おうと兄姉らで酒宴の席を計画した。みんなで歌を歌うことになった。歌は「家族になろうよ」「ふるさと」の２曲。歌はいい。歌は世につれいつの時代も人の心に響く。小中学校の卒業式で聞く子どもたちの歌声にはいつも胸が熱くなるのを覚える。また「家族になろうよ」は、歌詞がいい。お父さんみたいに大きな背中で♪、お母さんみたいに静かな優しさで♪、おじいちゃんみたいに無口な強さで♪、おばあちゃんみたいに可愛い笑顔で♪等々。

さて、私たち子どもらは結婚し家族を持ち、今では孫を合わせて20人を超す一族になった。そんな家族が一堂に集まる機会はそうはない。今から米寿の祝いが楽しみだ。

司会は姉の子ども達にやってもらい、受付はお前のところ、歌の担当はお前のところで等々計画はすべて唯一女の姉が仕切る。私はいつものようにギター担当。

ところで母は働き者で毎日暗くなるまで畑仕事をしている。稲刈りや脱穀も一緒に。たまに実家へ寄ったときは昔と変わらない母がいる。見習わないといけない。いつも思う今日この頃である。

（本山　祥弘）